検討課題に対する第2専門委員会の検討状況･方向性

資料6

3　県立高等学校と中学校や大学等との連携の在り方

検討課題	検討状況･方向性	青森県高等学校長協会の意見
⑦ 学校連携の今後の方向性 (ア) 今後の中高一貫教育等を含めた中高連携の在り方	・ものづくりや理数科に関する関心の低さは、今後の日本の技術･技能の力に深刻な影響を与えることになります。工業高校では中学校との連携について、特に「ものづくり」について、生徒のみならず教員に対しても啓発の必要があり、工業高校全体としてひとつの方向を示し、ひとつの施策として取り組むべきと考えます。 ・連携型中高一貫教育との検証と今後の在り方 田子高校など先進校の分析結果を見ていないので判断しかねます。 併設型中高一貫教育の拡充及び中等教育学校の可能性 今年度より始まった県立三本木高等学校付属中学校（仮称）の例を見ると、その関心の高さと期待度が分かるが、その分析結果が出るまでは判断しかねる。 中高一貫教育制度以外の方策 現在のところ特に思いつきません。 ・　本県初の併設型中高一貫校である、三本木中学校の志望倍率が3.18倍ということを考えると、上級学校を目指した六年一貫教育に対する児童･保護者のニーズは高いものがあると思われる。そういう意味では、地域バランスを考えて、あと1～2校県内に進学型の併設型中高一貫校があってもよいのではないかと思う。県内に2～3校の併設型中高一貫校であれば、特色ある学校づくりや個性に応じた学校づくりという時代のニーズに応えながらも、全体的な受験の低年齢化を招くまでには至らないと思う。 ・選択肢としては必要 今後については、先進事例の分析データにより検討 目的の明確化と実践体制の整備が課題 個別には、中･高での情報共有や出身校との交流の推進 ・十和田市に1校、平成19年度より開校することになっているが、津軽地区にももう1校あってもいいのではないか。 ・中高･高大どちらも連携して教育を進めた方がよい。	連携型については現行の二校の状況を検証し、あくまでその地域からの強い要望があった場合のみ導入すべきであり、校地が隣接または校地の一部を共有するなど、教員の交流が容易に図られる条件で設置すべきである。 併設型については三本木中高の動向を検証して成果を見きわめてからでよく、地域バランスからは、県都に中等教育学校を、中南･西北地域に併設型中高一貫校の設置を検討すべきである。 また今後、LD･ADHDなどの傾向のある生徒の指導方法について、中高の連携、情報交換が一層必要になってくると思われる。それぞれの授業公開、中高教員共同での教材づくり等、地域の特性･実態に応じた連携が必要である。

3　県立高等学校と中学校や大学等との連携の在り方

検討課題	検討状況･方向性	青森県高等学校長協会の意見
	・連携型は中学校と高校が相互乗り入れ授業などをすることにより、生徒の実態を把握することができる上、特色ある教育課程を編成することができる。また、生徒の人員確保もできるという利点もある。郡部校では推進していくべきと考える。 併設型及び中等教育学校は一般的に大学受験を含むエリート教育を期待する傾向がある。本県にも2～3校は在ってもよいと思うが、これが小学校に受験競争を拡大しないような入試制度を望む。 生徒指導、学習指導、進路指導、特別活動等の中･高の教員の研究授業、研究会等の交流や部活動、ボランティア活動等を一層推進する。 ・連携型は生徒及び職員の交流があるため、利点は多いが職員の負担が大きいことと選ぶ高校が少なく･地域から評価されている高校でないと成立しにくいと思われる。 併設型及び中等教育学校は「6年間の継続的な教育指導を通してゆとりある学校生活を実現する」という教育方針ですが、一般的には大学受験に対応できる効果的な教育を目指しており、中高連携としては「閉じた連携」である。むしろ現行の6･3･3制の教育制度を見直す実験校のように思われる。よって、各地区に1校はあってもいいのではと思う。 連携型の中高一貫教育で、入学する生徒を固定しないで生徒･職員の交流を行う連携。互いの出前授業、行事･部活動交流等を行うことで、職員の指導力向上、生徒の学校理解を図る。双方の学校側の負担が大きい。 ・連携型中高一貫教育は、地域の特色を生かした取り組みを行うことで学校活性化につながっており、高校が地域教育の中核として機能している。連携中学校からの志願者も増加している。 ・連携型中高一貫教育は、両校の努力によりそれなりの効果はあったと思われるが、保護者や地域住民の理解度がまだ薄く、生徒の学習に対する意欲低下を招く結果ともなっているようだ。簡便入試や連携選抜合格者と他校からの一般入試合格者との学力の格差が見られる事や、中学3年生の在籍数の減少等を考慮すれば小市･郡部に於ける中高一貫教育制度はこの際解消するべきと考える。 併設型中高一貫教育制度は、人工の少ない地域にはなじまないものと考える。	

3　県立高等学校と中学校や大学等との連携の在り方

検討課題	検討状況･方向性	青森県高等学校長協会の意見
(イ) 高大連携の在り方	・連携型中高一貫教育や併設型中高一貫教育については、私自身不勉強で情報や知識をあまり持ち合わせていないので言及できないが、専門学科･コース及び総合学科の系列の今後の在り方を考える上で中学校と高等学校は、今以上に情報交換する必要があると思われる。中学校側は専門学科･コース及び総合学科の系列の特色に関して興味･関心はあるが、実際にそれを知る機会は限られているのが現状である。また、高等学校側も中学生が現在学習している内容をしっかり把握しないまま指導しているように感じられる。よって連携型中高一貫教育で実施しているように、中高がそれぞれの授業を参観したり、実施するような機会を設けたり、教職員同士の懇談会を実施したり、特別活動や学校行事で生徒同士が交流することが必要になってくると思われる。 ・中学から高校へ移行する段階で生徒の精神面･学力面でのギャップが生じないように、また、6年間の体系的な教育を目指して、中高一貫教育を進めるべきであると考える。 特に、三本木高校のような併設型中高一貫教育については、その成果と問題点を踏まえつつ、今後も導入を検討すべきであると考える。また、さらに進めて、中等教育学校の導入も先進都道県の状況を調査し、検討すべきであると考える。例：都立の中等教育学校、群馬県立中央中等教育学校、山口県立下関中等教育学校、福岡県立輝翔館中等教育学校等。 中高連携として本県では、中高それぞれ年に数回授業公開、意見交換をする場を設けて、生徒や授業、学校のことを理解しあう必要があると考える。例：都立高校が盛んで都立西高校は中学訪問年間150校、中学での出前授業22回。 ・大学は教育機関と研究機関の2つの側面を持っています。工業高校へは、大学の教育機関としてのアプローチ（出前講義や大学･研究室の見学など）が多いが、工業高校側からも提供するものがないと互恵関係による息の長い連携にならないのではないでしょうか。専門高校の立場からは、何とか簡単でもよいので研究的な部分での連携により、生徒の専門性に対し自信と誇りを持たせたいと考えます。 ・対象大学が少なく、制度･システムとして考えることはできない。 個別には、大学授業の単位認定や特定分野（地域関連、エネルギー･環境など）での交流を推進。	大学で学ぶ意義の一端を理解し、選ぶ学部･学科のミスマッチ（大学の学部･学科の改編が進んでいる）を少なくするためにも、可能な限り連携した方がよい。 その内容としては、高校生の連携大学での単位取得、「総合的な学習の時間」等を活用した大学での一日体験学習、大学側の高校での出前授業･出前講義、教育実習生の受け入れなど、比較的容易に実施可能である。 工業･農業などの専門高校においても、進学が増えている現状を考えると連携は必要であり、スペシャリストへの道として高度な技術を目指す人材を育成する視点から、工業系大学や県営農大学校などとの連携が必要である。

3　県立高等学校と中学校や大学等との連携の在り方

検討課題	検討状況･方向性	青森県高等学校長協会の意見
	・現在、高大連携は普通高校･専門高校ともに連携している高校はあるいがその内容はかなり違うと思われる。 普通高校では、進学を意識させるためのあるいは進学に結びつけるための連携が主であると考える。しかし専門高校では、生徒の進学よりも生徒の学習つまり課題研究などの授業において研究内容をより高度に深化させるために、大学の研究室と連携をとりながらすすめているのが多いと考える。 つまり一口に連携といっても内容が異なるので、各校の実情に応じた対応を充実させるべきである。そのためには、大学側と連携しやすい環境づくりが大切と考える。 ・高校生に専門教科への興味･関心を高めさせ、大学進学に対する目的意識を明確化させるために、週休日に弘前大学、青森公立大学等の施設･設備を使って、大学の教員による専門科目の特別講座（1講座3日間程度）を開講するとかが考えられる。 国公立大学入試の専門高校枠の一層の拡大と入学後の専門高校卒業生のための普通科目（英語、数学、物理等）の補習授業の確保をお願いする。 ・青森公大や弘前大に青森県出身の高校生を優先的に入学させる（すでに実施していると思いますが） ・大学進学率が上がってきていることもあり、高校生のオープンキャンパスへの参加も多くなってきているが、見学等だけでは十分な理解が得られない。大学で学ぶ意義の一端を理解し、選ぶ学部･学科のミスマッチ（大学の学部･学科の改変が進んでいる。）を少なくするためにも、可能な限り実施した方がよいと思われる。また、中高の橋渡し教育と同様に、大学側でも近年、リメディア教育（基礎学力、論的思考力や読解力など総合的に涵養するもので、標準的教育課程に組み込まれてきている）に取り組んでいる。ただ、実施する場所をどちらに置くにしても、一方的に大学側からの支援に頼らざるを得ない状況にあるのではないか。また、高校生の希望する講義が地元の大学にないことも多いと考えられる。 ・連携の必要性は学術分野や学科の特色によって異なると考える。	

3　県立高等学校と中学校や大学等との連携の在り方

検討課題	検討状況･方向性	青森県高等学校長協会の意見
	・現在本校（木造高校）では、「総合的な学習の時間」を利用して、県内の大学･短大･専門学校を訪問させ、実際の授業を体験させたり、「産業社会と人間」の授業の一環として、県内の大学･短大･専門学校の教員を迎えて体験授業を実施してきた。いずれの体験も生徒にとって興味深く、進路決定に大きな影響を与えたようである。大学側も積極的に受け入れてくれる雰囲気があるので、高校側もこれらの制度を積極的に利用して、生徒の進路に対する意識を向上させることにより双方にﾒﾘｯﾄがあると考える。またこれらをさらに発展させて、長期休業中の集中講義等を利用して、大学で履修した授業の単位を高校の卒業単位として認定するなどの連携が可能であろう。 ・＜本校実施分＞ 弘前大学が開催する「高大連携高校生セミナー」を2年生が受講していて、週1回弘大で講義を受けている（希望制で現2年生は１２名受講）。 「東大･首都圏大学見学会(今年度３５名参加)、「東北大学見学会(９８名参加)」を年1回実施。 大学（東北大、弘大等）の教員による出前講義を年4回以上実施。	